

音楽教室におけるポピュラー音楽演奏

進行 深見友紀子（京都女子大学 深見友紀子ミュージック・ラボ代表）

事例報告者 藤田佐和子（ピアニスト ローランド・ミュージック・スクール講師）

佐藤かおる（作編曲家 ローランド・ミュージック・スクール講師）

赤羽美希（「うたの住む家」主宰 深見友紀子ミュージック・ラボ講師）

指定討論者 室田尚子（音楽評論家）

昨年の第 21 回大会シンポジウムで、深見は自身のピアノ教室（深見友紀子ミュージック・ラボ、以下ラボという）の子どもたちによるポピュラー音楽演奏例を紹介しながら、ピアノ教師の役割や生徒のピアノレッスンに対する趣向の変化など、ポピュラー音楽の導入に伴って生じている現象について説明した。

それなりに達成感があったが、その後も、ピアノ教師のほとんどがクラシック音楽志向であり、ポピュラー音楽を“デザート”のように捉えていることを知る機会が何度かあった。本学会員もピアノ教室に対してある種の郷愁あるいは憧れを抱くだけで、自分たちの研究と接点があるとは考えていないと思われた。近年、音楽教育関連の学会でもピアノ教育の在り方がテーマに取り上げられたことはない。

最も普及した楽器であるピアノによる、一般の子どもたちのポピュラー音楽演奏の様子を考察することによって、ポピュラー音楽の在りようが見えてくるはずなのに……。深見は、ラボの講師をしている赤羽と共有しているこの思いを旧友の藤田に伝えてみた。すると、「ピアノレッスンはクラシック、ジャズ、ポピュラーなど、ジャンル別にコースが設定されていることが多い。電子ピアノ、電子オルガン、シンセサイザーなどの電子楽器の導入によってジャンルの区分けが曖昧になったのではないか。」と藤田は言った。

3 人目の事例報告者を藤田にお願いした段階で、対象となる生徒の年齢層が広がった。さらに「ピアノ教室」における・・・から、「音楽教室」における・・・にタイトルを変更し、長年コンピュータを使ったレッスンに取り組んできた佐藤が事例発表者に加わることになった。こうして、当初、クラシックとポピュラーとの二項対立を止揚したピアノ教育のあり方を議論しようとしていた深見は、少々戸惑いながらも視界を広げることにした。

さて、ワークショップ当日の進行は、まず深見から簡単に趣旨を説明して発表者それぞれが事例発表を行う。その後、深見が総括し、指定討論者の室田の司会進行で議論に入りたいと考えている。

藤田と佐藤は、主としてローランド・ミュージック・スクールにおける中学生以上の大人を対象とした事例を取り上げる。藤田は、CD、iPod、YouTubeの活用方法、MIDIデータやシンセサイザーなどを使うことによって、これまでピアノだけでは扱われなかったジャンルの楽曲を、バンドの“キーボード奏者”のように演奏している事例を紹介する。佐藤は、既成曲の“打ち込み”や編曲では満足できなくなり、オリジナル楽曲の制作に取り組むようになった生徒の様子を、発表会の映像や音源を示しながら報告する。

深見と赤羽は、ラボにおける小学生以下の子どもたちの事例を取り上げる。深見は、インターネットを活用した楽譜の入手方法、彼らにとって人気が高い音楽とはどのような曲で、なぜそれをピアノで演奏したいと思うのかについて、発表会での選曲を例にあげながら述べる。赤羽は、そうした子どもの願いを叶えるためのピアノ譜面づくりの実際、さらには、子どもにとって最も身近な音楽である、彼ら自身の音・音楽（即興演奏や作曲など）を紹介する。

話題が拡散しそうであるが、一般的な音楽(ピアノ)教師ではないということの他、私たちに多くの共通点が存在する。その一つは電子メディア・ネットワークを積極的に活用している点である。音楽聴取の方法が変わることによって、ポピュラー音楽へとレパートリーが拡大し、学び方や教え方が変わり、気づかないうちに、レッスンの場に佇む人々の感じ方をはじめとするさまざまな面に変化がもたらされ、従来の音楽教室とは異なる様相になっている。

次に、それらの変化と関連する事象として、レパートリー選択の主導権が教師から生徒に移っていることがあげられる。演奏する楽曲を生徒が決めるようになると、徒弟制度に基づいた音楽教室はその基盤を失っていく。

相違点もある。藤田と佐藤の事例では、生徒の演奏力と作編曲力、ソロとアンサンブル、「鍵盤」と「非鍵盤」との境界が曖昧になっている。深見と赤羽の事例では、ピアノ教室の“デザート”だったポピュラー音楽が“メインディッシュ”になり、従来のレッスンで中心的な座を占めていたクラシックピアノ教則本が、その都度処方される“サプリメント”となっている。ピアノ科出身の藤田と佐藤がピアノ以外に触手を伸ばす一方で、ピアノ科出身ではない深見と赤羽は、子どもの生活に密着した音楽表現を実現するためにあくまでもピアノを使う—このことも興味深い。

教則本に沿って指導するピアノ教室とポピュラー中心の電子オルガン教室とに二分されていた鍵盤教育の“勢力図”が崩れ始めて20年以上が経過したが、まだ再編の兆しさえ見出していない。この混沌とした状況をめぐって、クラシック、ポピュラー両方の研究に長けた室田がフロアとの議論のきっかけをつくる。

(文責 深見友紀子)